

使われなくなった
のこぎり屋根工場
今後を語る座談会

第五回

報告書



座談会内容

『ノースライトギャラリー展示計画』

日時、平成二十九年三月二十六日

午後二時～四時

場所、カフェ&ギャラリー ダンテ

一宮市奥町大切前7 1- 1

第五回のコ座 『ノースライトギャラリー展示計画』

日時 平成 29 年 3 月 26 日 14:00 ～ 16:00

場所 カフェ & ギャラリー ダンテ

参加費 500 円 (ダンテのドリンク代)

- 1、イングランドの工場 (吉田敬子さんより)
- 2、現地レポート (園原くんよりスライド)
- 3、展示計画

イングランド北部ヨークシャーにあるノースライトギャラリーは、かつては大きな繊維工場でした。この地方も繊維業の衰退で多くの工場が存続に危機に陥りました。ノースライトギャラリーオーナーのマークさんは、先祖が築いてきた歴史や文化を書物の中の物語だけでは終わらせたくないという想いで、工場を大切に保存し、2000年に立派な美術館としてオープンしました。

2005年に写真家の吉田敬子さんがこの美術館を訪れています。そのとき交わした「いつかこのギャラリーで日本の鋸屋根工場の写真展を開催して下さい」という言葉。12年経った今、この約束を果たすために動き始めます。



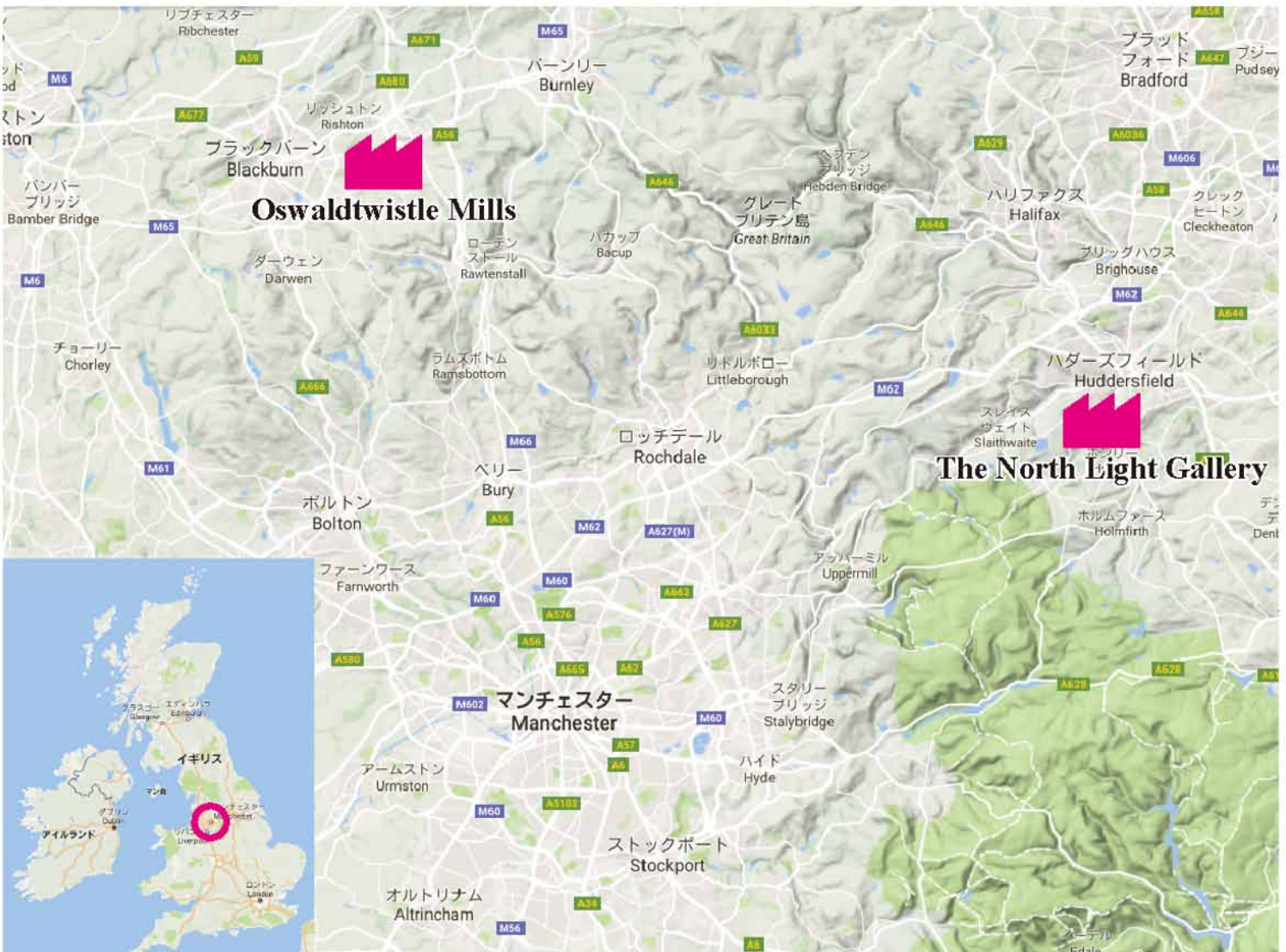
今回は吉田さんにも参加して頂き、イギリスの工場の歴史や構造、ノースライトギャラリーオーナーのマークさんの熱い想い、ノースライトギャラリーをオープンするまでの経緯を伺いました。

(添付資料 p. 13 ~ 16 「鋸屋根に魅せられて」 参照)

1541年創業のマークさんのご先祖の工場は、広大な規模で、長い間その町を支えてきました。そんな背景のある工場を、周囲の工場のように解体してもっとお金になる事業を始めるというようなことは、マークさんにはとてもできなかったそうです。この町で生きてきた人達の痕跡、歴史をしっかりと守っていく、そんな役目をマークさんは背負っているのだと思います。吉田さんののこぎり屋根に対する飽くなき想いと、マークさんの先祖から受け継がれてきた想いが出会った瞬間というのは凄い衝撃だったのだろうと想像できます。

次に、名古屋工業大学大学院を卒業したばかりの園原くんが現地のレポートをしてもらいました。彼は第二回のご座の吉田さんによる「ノコヤネコウバショー」を見て、のこぎり屋根の存在を再確認したようで、三月中旬に卒業旅行でヨーロッパを周遊した際に、ノースライトギャラリーや、現存する世界最古の鋸屋根工場マッソン・ミルを訪れました。園原くんが渡欧する前に、吉田さんも交えてマークさんに伝えてほしいことを彼に託しました。運良くマークさんに会えたようで、吉田さんの手紙を渡してもらい、一宮での動きを伝えてもらい、マークさんに工場を案内してもらったそうです。次項より (p. 4 ~ 10)、園原くんのレポートです。

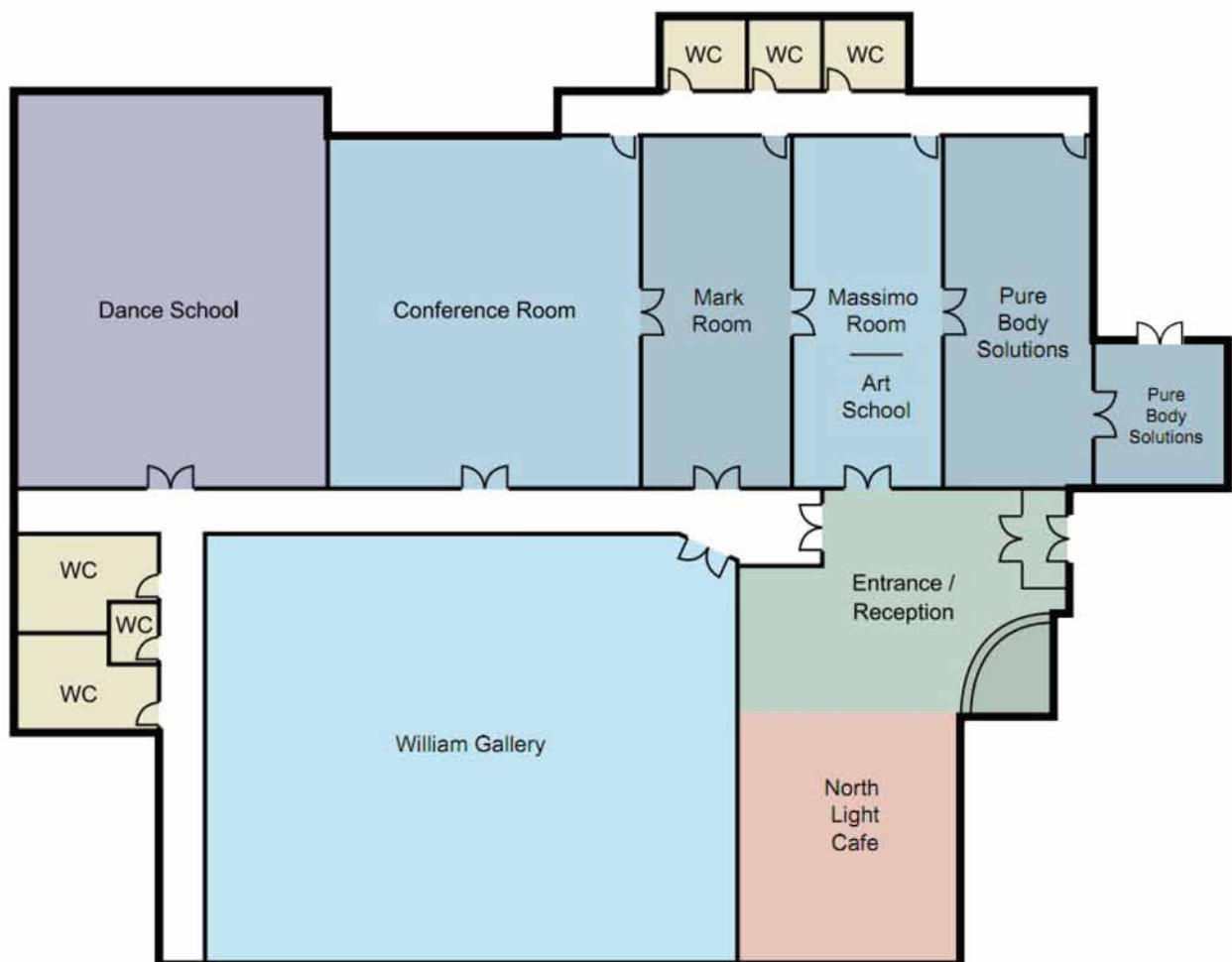




2017.3.9～11の3日間、マンチェスターに滞在し、ウエストヨークシャー州にあるノースライトギャラリーと、ランカシャー州にあるオズワルトウィスル・ミルズを訪れました。

ノースライトギャラリーは、マンチェスターから電車で1時間のベリー・ブロー駅から歩いて10分ほどの場所にあります。駅を降りると、目の前にレンガ造りの住宅と山の景色が広がるのどかな街です。少し歩くとすぐにノースライトギャラリーの標識があり、街のシンボルになっているのがよく分かります。

ノースライトギャラリーは、エントランスを含めて7つの部屋で構成されていました。ギャラリー用の部屋が2つ（1部屋はミルの歴史展示に使用）、イベントやパーティー用の部屋が2つ、アートスクールやダンススクール用の部屋が1つ、カフェが1つです。お昼にギャラリーに着いたのですが、カフェスペースは子ども連れのママさんで賑わっていて、夕方にはダンススクールに来る子ども達で賑わっていました。部屋は白い無地の壁で統一されていて、利用者が使いやすい空間にしていました。内部は大規模な模様替えがされているようでしたが、行政からの援助が少しあるそうです。その分行政の意向も入り、自由度が多少減るともおっしゃっていました。また驚いたことに、カフェとWilliam Galleryの2部屋の天窓だけが北向きで本当のノースライトでした。



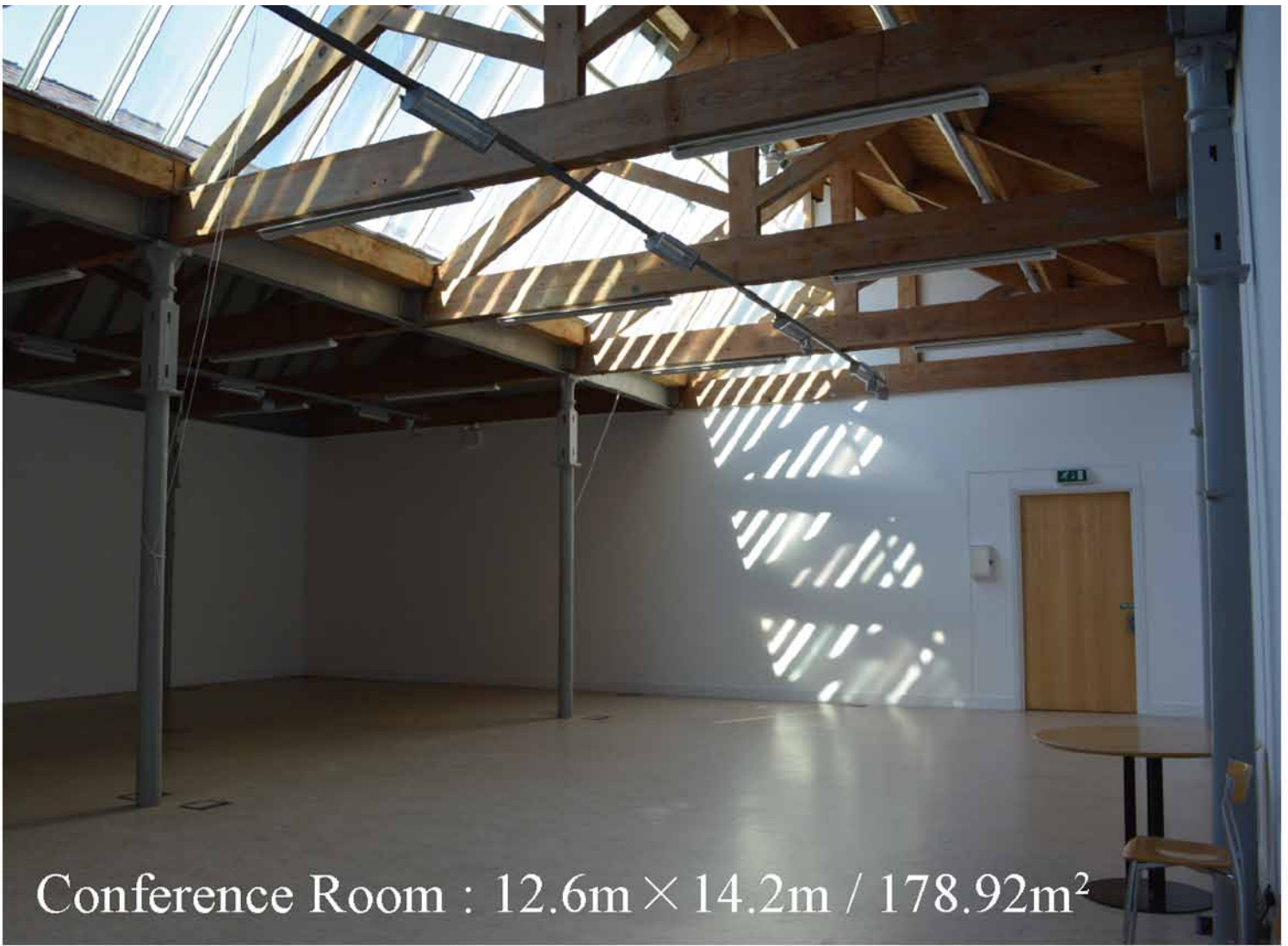
(www.northlightgallery.org.uk/rooms/)



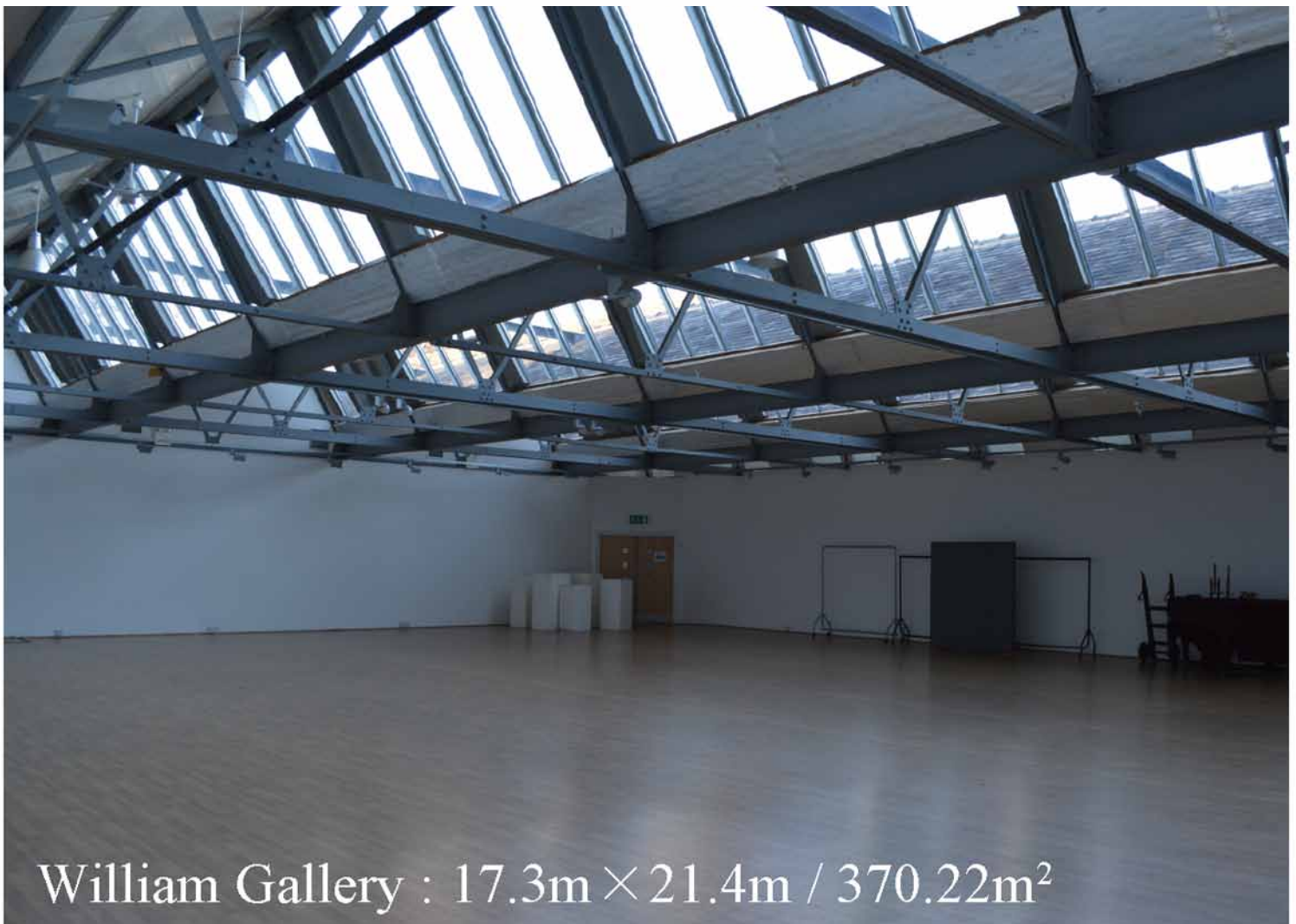
Entrance / Reception



Massimo Room : 6.06m × 14.2m / 86.05m²



Conference Room : $12.6\text{m} \times 14.2\text{m} / 178.92\text{m}^2$



William Gallery : $17.3\text{m} \times 21.4\text{m} / 370.22\text{m}^2$



マークさんに会うことができたので、その時に印象に残ったお話をします。

まず駆け足でしたが、マークさんがミルを案内してくれました。マークさんの運営するミルはノースライトギャラリーの他にオフィス、フィルムスタジオ、住居、ショップ、障害者施設などがあります。

ハード面の話で印象に残っているのは、屋根と屋根の間の雨漏りを防ぐために様々な方法を試しているということ、建物を修復する際には、できる限り自然な材料や当時使われていた材料を使い、建物が息をできるようにしてあげているということです。ミルを大切にし、ミルと一緒に生きている、マークさんの人柄が伝わってきました。

ソフトの面では、複数のコンテンツを持たせることが重要であり、経済がどう動くかわからない中、複数の選択肢を持つことで柔軟に対応することが大切だとおっしゃっていました。マークさんのミルでは、レジデンス、オフィス、スクール、レジジャー1つの場所にまとめて新しいコミュニティの場を作ろうとしていました。





展示のこともマークさんと少しお話をしました。

吉田さんがギャラリーを訪れたことについて、「もちろん、覚えているよ。」とおっしゃっていました。展示については、「何について展示したいの？」と聞かれましたが、まだ決まっていないことを伝え、吉田さんから預かった日本ののこぎり屋根工場の写真を渡しました。木造は珍しいみたいで、マークさんは喜んで写真を眺めていました。

その後、のこ座の様子や先日なかなか遺産の時に巡った工場の写真を見せ、簡単に活動を紹介しました。マークさんに興味を持ってもらい、たくさん質問を頂いたのですが、あまり答えられませんでした。言葉ではなく、知らないことが多すぎました。反省です。これから一緒に勉強させてください。僕が話をしたことで展示をやることが決まった訳ではありませんが、平松さんにバトンは繋ぐことができましたと思います。

園原 諒

最後に、今後の計画を話し合いました。マークさんの了承を得るためにも、決めなければならない事はたくさんあります。いつ、どんな、何のために展示をするのか。資金調達手段。展示後の展開等です。参加者の皆さんの意見をまとめました。

吉田さん

ギャラリーに写真を展示するだけでなく、その先のことを見据える必要がある。イギリスのギャラリーとどのような関係を築いていきたいのか。一宮としてどのような取り組みをしていくべきなのか。そのためにはまずのこぎり屋根工場の存在意義をしっかりと確認しなければならない。教科書には載っていない、生活と濃密に交わっていた日本の産業の歴史を、今に伝えることができる本物の素材であるのこぎり屋根工場の存在は、決して失ってはいけない。本当に大切な情報というのは、そこに携わっていた人々の生の声であり、それこそ後世に伝えなければならないもの。そういう根底にある想いを、マークさんとじっくりと話し合うべき。

青木さん

マークさんは先祖代々の想いを背負っている。マークさん個人だけの意思ではない、受け継がれてきた強いものを感じる。それは一宮でも同じことが言える。おじいさんの世代から今の若い世代へ乗り移っていくような、血液の中を流れているような、綿々と受け継がれていく意識を絶やさないようにすることが大切。そしてそれをどのように伝えるかが重要。ノースライトギャラリーとつながることはその意識を国境を越えて共有し、さらなる広がりや強さをつくることに意義があると思う。

池俣さん

2019年の愛知トリエンナーレを一宮市で行うべく、「のこぎり屋根芸術計画」を一週間前に立ち上げた。のこぎり屋根は美しく、一宮市の大きな可能性が詰まっている。一宮市で芸術、文化を語る上で欠かせない存在である。

野田さん

一宮市の中だけでなく、他の土地と共通のもので繋がりができることはとても大切なこと。

朱宮さん

マークさんには工場を通して町に対する強く大きな想いがある。平松毛織、そして一宮にも、のこぎり屋根、まちづくりに想いはあると思う。今回の計画は、それらの全く別の土地で生まれた想いが、ある共通項を通して共鳴するという可能性におもしろさを感じる。同時にそれはとても大切なことだと思う。

加美さん

行政の協力を仰ぐのではなく、まずは自力で結果を残すべきではないか。関わっていない事が恥ずかしいと行政が自ら思うような、しっかりとした核心のあることをすればいい。そうすればきっといい結果につながる。そしてイギリスに行くにあたって、まずはこちらの勉強や研究が欠かせない。のこぎり屋根や一宮の歴史、現状、将来の展望。また、どのような展示をするべきなのか。成功した展示の例を研究し参考にするのはどうだろうか。

石丸さん

まずは認知されることが重要だと思う。今回の活動、のこぎり屋根の魅力を、一宮市民に知ってもらうこと。のこぎり屋根が一宮市民にとってどれだけのインパクトがあるのかが疑問。しっかり計画を練って、途中で終わってしまわないようにしてほしい。

皆さんの意見をまとめると、

「展示の計画は、のこぎり屋根工場の意義と将来の展望を形にまとめることから始まる」ということだと思います。ぼくは7月下旬にノースライトギャラリーを訪問する予定です。そのときマークさんにこちらの考えを明快に、力強く伝えるために、作文、議論、研究を繰り返し、一宮におけるのこぎり屋根の意義と展望を見せられる形にまとめたいと思います。

第六回のご座では、北イングランドの工業地帯でも出版された『遺産としての工場散策マップ』や桐生市ののこぎり屋根がプロットされた観光マップ等を参考にしながら、一宮ののこぎり屋根構想図を作成するための議論をしたいと思います。この地図には現状を示すだけでなく、将来の構想を盛り込み、のこぎり屋根工場の意義と今後の展望を表現します。ノースライトギャラリーでの展示への第一歩として、また一宮ののこぎり屋根の今後の指針草案として活用できる有意義なものを目指します。参加者の方には当日までにお気に入りの工場を各自いくつかピックアップしてきてもらい、当日皆で地図に落とし込みながら話し合いを進めたいと思います。ご協力お願いします。

今回のような国境を越えた大きな展示計画は、途中で挫折してしまうのではないかという声もあります。しかし、のこぎり屋根がここに残っている限り、計画が終わることはありません。

平松毛織株式会社取締役 平松久典

鋸屋根に魅せられて

写真家 吉田 敬子



2005年1月末から2月中旬にかけて、限られた時間と範囲ながら産業革命発祥地、イギリスの鋸屋根工場を追いかけ、旅をしてきました。イングランド北部を中心に産業革命初期の遺跡を見学したり、早朝から日没まで闊歩しました。日中の気温は7～8度天候は霧、小雨、晴れ、濃霧と目まぐるしく変わり夜は寒かったです。農夫が経営しているB&Bに宿泊し、暖炉と暖かいミルクティーでもてなして頂きイギリス人の生活様式を体験してきました。

イギリスでは18世紀中頃から木綿糸を紡ぐ紡績の機械化が進み、道具が機械に変わり産業の技術的基礎が一変、小さな手工場の作業場が機械設備による資本主義的な大工場になり、18世紀後半から19世紀はじめにかけて産業革命がおこなわれました。主導したのは綿工業でした。工場制度出現に、決定的な役割を果たしたのは、発明家であり経営者でもあった、リチャード アークライト(1732～92)理髪業(手先が器用で鬘職人だったそうです)のかたわら、英国綿業の綿糸不足を見聞し、1769年水力で動かされるローラ式紡績機械 ウォーター フレームを発明しました。その後租紡機、カード、綿花供給装置を発明、特許取得、全工程を機械化し英国の純綿織物大量生産を可能にし、巨万の富を築きました。本格的な工場は1771年建設のクロンフォード ミルで、世界で最初の綿糸紡績工場です。世界文化遺産に登録されています。工場は鋸屋根ではなく、1770年代に鋸屋根は出現しなかったそうです。アークライトが三番目に建てた綿紡績工場「マッソン ミル」これが、写真の鋸屋根工場です。9連の鋸屋根と5階建ての煉瓦造で1783年の建築です。建物の外壁は赤煉瓦で窓枠は白によって縁どられ、モダンで美しい工場でした。

ダーウエント渓谷に沿って建つ「マッソン
ミル」の周囲は木々が生い茂り小雨まじりの
なか創設当時の姿を損なうことなく残されて
いました。イギリスの鋸屋根！感無量でした

通常、鋸屋根といえば平屋建てを想起しま
すがイギリスの旅では、重層建築の最上階に
も三角屋根がありました。北から採光するか
ら通称ノースライトとも呼ばれています。
シェッド（小屋）は、平屋建てを指しており
必ずしもギザギザの鋸屋根だけを意味するも
のではなく、切妻屋根の連続する、M字の形
をした平屋建てもシェッドと呼ばれています
鋸屋根工場は、単純さ、効率の良さ、維持管
理の容易さから大量の機械を収容するために
建てられたのです。重層建築の各階にも力織
機は設置されましたが、台数が増えるとその
重さと振動に耐えるには、平屋建ての方が好
都合でした。また織りあげられた布の喜し悪
しを判断するのに、電気の無い時代、自然光
が欠かせなく、北からの光線は眩しさがなく
一定で織物の色調を判断するのに最適だった
のです。時代が変わり役目を終えた鋸屋根は
近年イギリスでも姿を消しつつあります。

ミルと言うと、高層で大きく煉瓦造りで目
につきやすく、鋸屋根は建物の間などに建てら
れシェッド（物置小屋）と呼ばれ、イメージ
が良くなく、鋸屋根の利点を目にすることが
ないため取り壊されてしまうようです。

ミルは大きく煉瓦造りのため、スーパーや貸
ビル、賃貸マンションに利用されています。
頼もしい出会いもありました。所有者や工場
の関係者の話しです。ミルの事を伺うと目を
輝かせて、自慢話を聞かせて下さいました
可能な限り手放さず、資料館などにして歴史
を伝え残したい。と熱く語っていました。次号につづく



鋸屋根に魅せられて

写真家 吉田 敬子

産業革命で富を得た企業家は、膨大な敷地と建物を後継者に残しましたが、紡績業が衰退し、土地と建物が残されました。ハダースフィールド(ヨークシャー)にある、1838年建設の「アーミタージブリッジミル」も、そのひとつです。敷地内は避暑地のように、小鳥がさえずり白樺の木々と小川が流れ、とても美しい光景でした。その奥に大きなミル(工場)があります。現在「ノースライトギャラリー」の経営者マーク氏を訪ね、話を伺いました。

工場は1541年操業で、手紡ぎ手織物を、水力による工場から始まり、1830年~40年にかけて動力機工場へと、一貫した総合毛織物工場を次々と建設し、1930年までには、さらに拡張されたそうです。その後、インドや中国の紡績会社が進出し、不景気になり工場は閉鎖し、一部は取り壊したそうです。

大半の経営者は、取り壊したり、貸しビルなどにして収入を得ていますが、この敷地と工場には、先祖が職人が築き上げてきた歴史があります。このミルをどう運営したらいいのか。リゾート開発するか、建物を取り壊して、土地を売却し、富を得て安定した生活をおくる方法をとるか。など悩み考えました。

いま私が残し伝えなければ、先祖が築いてきた自国の歴史 文化は、書物の物語で終わってしまう。と言う危機感から、困難は沢山ありましたが、2000年のカウントダウンと同時に「ノースライトギャラリー」を立ち上げました。と笑顔で力強く語っていました。自国に対する愛国心、歴史 文化に対する英国気質、英国魂を見せつけられた出会いでした。ギャラリーは、4連と5連の鋸屋根2棟で、展示室とカフェになっています。日本から持参した、鋸屋根の写真を見せると、木造のシェッドは始めて見た。と感動して頂き、いつか、このギャラリーで日本の鋸屋根工場の写真展を開催して下さい。と大きな夢と希望を託されました。



ランカシャー地方にある1827年建設の「モスコウ ミル」はイギリス最古の鋸屋根紡績工場です。鋸屋根のルーツを求め撮影してきた私には、夢のような時間でした。現在は資料館と生活雑貨のショッピングセンターになっています。店内は創設当時の姿を損なうことなく鋸屋根から差し込む自然光は爽やかな空間を提供していました。操業当時は600台の織機があったという店内の床や柱には、処所に痕跡が見られ18～19世紀の職人たちの声や音が聞えるようでした。しかし産業革命は多くの社会問題をひき起こしました。工場制生産が労働者階級に与えた影響として、労働者の貧窮化と労働条件の悪化は、従来とは質的に異なった残酷さに充ちていました。当時の労働者は慢性的過労と栄養失調などで、労働者平均寿命は20歳そこそこだったそうです。その後、工場に併設した幼年工寄宿舍や労働住宅などを建て、労働規律を高めたそうです。資料館には労働者の生活風景や紡績工場の歴史が詳しく展示されています。今回の旅で50棟以上の鋸屋根を確認することができ、予想以上だったので驚いています。絹の町、マクレスフィールドには、シルク博物館になっている「クオーリバンク ミル」もあり、訪ねたいミルは沢山あります。ミルは高層で大きく煉瓦造のため、比較的、保存活用されていますが、シェッド鋸屋根は取り壊され、姿を消しつつあります。羨ましかったのは、100年以上絶つ鋸屋根工場を賃貸アパートにするため、改装工事でした。覗かせてもらい感動していた私を見て工事現場の人達に、変な？日本人、と笑われてしまいました。鋸屋根のルーツを訪ねた話はつきませんので、いずれまた紹介致します。

